

危機介入における社会福祉学的社会支援の研究について

～児童虐待への危機介入活用方法～

鈴木 聖子

私は、論文のテーマに危機介入と児童虐待について、主にとりあげることにした。

そもそも、このテーマを決めた理由としてはいくつかあるが、その一つは危機介入が世間にあまり知られていないと感じたことと、危機的状況である児童虐待とはいかなるものか十分に理解されていないと感じたことである。おおまかに言って、危機介入方法や児童虐待にはどのようなものがあるか、どのような援助をすればいいか。特に、児童虐待においては、多くの文献などで取り上げられているけれども、具体的にはどのような状態のものを言うのかなどが主な疑問としてずっと心にあった。

ここでは児童虐待に触れる前に、危機介入理論について特に考察を深めるものとする。本論文で、研究の最も多くを占める危機介入理論について「危機介入概要」として掘り下げ論じた。具体的には、危機介入理論の定義・歴史・ケア方法・知識基盤・他心理療法との連携についてと論じる。

危機介入の概要・定義・また、危機に陥る前段階にあるストレスについて、そのメカニズムを説く。そして、危機理論を知るために必要な問題を6つに分類し、提起している。内容としては、①危機とは何なのか。危機介入とは何なのか。②危機連鎖の主たる要素は何なのか。③タイミングと時間制限はいかなる役割を演じるか。④ヒューマンサービスの分野で、なぜ危機介入が必要なのか。⑤危機介入の歴史的背景について。⑥危機アプローチから生み出される実践の意味は何なのか。である。それらをふまえたうえで児童虐待について述べる。

児童虐待は、危機介入シチュエーションとして取り上げる「児童虐待概要」として、児童虐待の概要と定義、その原因や法制度をはじめ解決しなければならない問題が山積みされている今や、日本において2000年に児童虐待防止法が成立した流れ、日本における児童虐待対策の動向、その現状、過去の児童虐待に対する社会対応へと論述を進めた。児童を保護するために制定された法律であるが、児童虐待防止法成立後も、児童相談所における児童虐待相談処理件数は減少するどころか増加している。これらの現状について、概要や定義に触れ児童虐待のあらましを見た上で把握する。

そして、定義とはなっていないが、虐待と一言で言っても躰と称された虐待と心的衝動から生じる虐待がある事を考察し、それらに触れて違いと現状で起こりうる虐待とはどちらに分類されやすいかを過去に遡り比較し論じる。詳細に言うなれば、概要や定義とは別に虐待をobsessive-compulsiveなものとそれ以外のものに分けて説明をする。Compulsion (強迫行為、強迫欲動) と呼ばれる、自分で止めようと重っているのに止められない好意や欲動は、obsession (強迫思考) とは区別され、ギャンブル癖等の衝動行為 (impulsive action) と密接に関連した言葉である。強迫児童虐待とは、子どもは愛さなければならないとの思いに“取り憑かれている” (obsessed) 親が、つい (impulsively=人格の衝動統制機能による抑止を欠いた状態で) 虐待を繰り返してしまうというものである。

これを親の無知や貧困から子どもの生命が危機に陥るといった古典的な児童虐待との違いについて理解を深め、現状にある虐待はどのようなものであるか。背景にある社会はどのようなになってい

るのか考察する。日本の虐待の現状について、虐待の相談件数・虐待方法・主な虐待者等を統計にてまず明らかにする。それらの統計で明らかになった通り、児童虐待の虐待者の多くは実の母親である。その背景にうかがえる育児により追い詰められる母親像について掘り下げる。虐待に陥る母親の特徴をいくつか分類している。それから述べられる虐待との関連性を明らかにする。

現在、親の育児・教育能力が低下し、子育ての孤立化と不安・相談の増加がみられるといわれている。育児について持つ悩みや重圧も様々に分岐し、多様な問題を抱えるようになっている。それらの母親にはどのようなパターンがあるのか。虐待問題解決の起こりうる背景とともにタイプを5つに分類し、説明を行う。

虐待問題が起こる中で、現状としてそれらを解決するべく社会福祉制度が求められ改革が進むが、即対応に至れるフォーマルなサービスが機能しきれていないという現状が昨今問題として挙げられている。現在はどうか対応しているのか、フォーマルサービスが目指しているケア、そしてフォーマルだけで対応しきれていなかった部分をサポートしている機関等に視点を置き、これから先の児童虐待の早期発見・予防・支援の方法について一考察上げ問題提起する。それらについて「まとめ」として、民間相談機関であるCCAPにまず焦点をあて相談者の現状を述べ、現在の児童虐待の年齢別比較と保健・医療分野のネットワークのあり方について記述している。以上をふまえてこれからの危機介入の問題提起と結論を述べている。